



教皇様の聲

3

227号

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticano の転載許可済 ©1999

## キリストこそ苦しみへの解答 (メキシコにて、病に伏す人々へのメッセージ)

● 兄弟姉妹の皆さん。これまで世界各地への訪問で行なってきたように、この病院に入院中の皆さんと、皆さんを通して国じゅうの全ての病に伏す人々と共に、祈りと希望の一時を過ごしたいと思えます。私も皆さんと愛する人々の祈りに加わり、グアダルベの祝された処女マリアの取り成しのもと、神に願います。心と体の健康をお与えくださるよう、また皆さんの苦しみをキリストの苦しみと一致させ、信仰に基づく希望をもって、人類の苦しみの意味と理由を探し求めることができますよう、お助けください。

医師や医療関係の専門家など、無私の心で病人のために尽くす人々と同様、私も苦しむ人一人ひとりをとて身近に感じます。私の声が全ての病人と医療関係者のもとに届き、キリストの御声を伝え、病人には慰めを、医療に携わる人々には病人を助ける使命への励ましをもたらすことを願っています。救い主の贖いのみわざにおいて、苦しみが価値あるものであることをぜひとも思い起こしていただきたいと思えます。

### 苦しみは人間生活の神秘

皆さんのそばにいること、愛情と技能をもって皆さんに奉仕することは、単に人道的・社会的な仕事ではありません。それは何よりも、すぐれて福音に忠実な行動です。キリストご自身が、道端にけが人を見つけて「道の反対側を通り過ぎる」ことをせず、「あわれに思い、包帯をして…介抱した」(ルカ10・32~34) 良いサマリア人のようであれ、と言われるからです。福音書のそこかしこに、イエズスとこうした様々な病に苦しむ人々との出会いが描かれています。聖マテオによると、「イエズスは全ガリラヤを巡り、その会堂で教え、天の国の福音をのべ、民の中の全ての病、全ての患いを治された。そのうわさは全シリアに広まり、いろいろな病気と悩みに苦しめられている人、悪魔につかれた人をすべてイエズスのもとに連れてきたので、これを治された。」(マテオ4・23~24) キリストにならない、聖ペトロが神殿の美門に来たとき、足なえの人

がいたので歩けるようにしました。(使徒行録3・2~5参照) そこで「人々は病人たちを道に運びだすほどになり、寝台や担架に乗せ、ペトロが通るとき、せめてその影に覆われようとした。」(同5・15~16) 最初の頃から、聖霊に動かされた教会はこの点でイエズスの模範に倣おうと努め、苦しむ人の傍らに居ること、特に病人への愛をはぐくむことを自らの義務・特権であると考えました。ですから私も使徒的書簡『苦しみのキリスト教的意味』で、「教会はキリストの十字架の贖いの神秘によって生まれたのですから、特に苦しみの道で人間に出会わなければなりません。この出会いの中で人間は〈教会の道になる〉のです。この道は、また最も重要な道なのです」(3番)と述べました。

● 人間は喜びと幸福に招かれているものの、日々多くの形で苦痛を経験します。病気は人間の苦しみの中でも最も数多く、普通のものです。病に直面すると、私たちは問いかけずにいられません。なぜ苦しむのか? 何のために? 人々の苦しみの意味とは? 心身の苦しみも前向きな経験になり得るのか? 私たち一人ひとりが、一度ならずこのような問いを發したことがあるでしょう。ベッドで苦しんでいる時、回復期にある時、これから手術を受ける時、また愛する人が苦しんでいるのを見る時にも。

キリスト信者にとって、これらは答えの出ない問いかけではありません。苦しみは、しばしば理性では計り知れない神秘です。苦しみは人間の秘義の一部であり、人間に人間自身を啓示するイエズス・キリスト以外には説き明かすことができません。ただキリストを通して、私たちは人間であることの意味をくまなく知ることができます。先の使徒的書簡に書いたように、「苦しみは恩寵によって外側からでなく、内側から変質され、変えられます。…しかしながら、この内的な経過は、いつも同じ型にはまってたどられるとは限りません。…キリストは直接にはお答えになりませんし、苦しみの意味についてのこの人間的問いかけに、抽象的にもお答えになりません。人間は自分自身がキリス

トの苦しみにあずかるものとなることによって、次第にキリストの答えを聞くようになります。…それは召命です。〈私に従ってきなさい。〉来なさい！あなたの苦しみを通して、世界を救う仕事に参加しなさい。私の苦しみによって達成されたあの救済の業に！私の十字架を通して。』(26番) これこそ、苦しみの謎に直面した時、キリスト者が「主よ、御旨が成し遂げられました」と言うことのできる理由です。そしてイエズスと共に繰り返すのです。「父よ、できればこの杯を私から取り去りたまえ。けれども私の思うままではなく、み旨のままに。』(マテオ26・39)

● 人間の偉大さと尊厳は、神の子であること、キリストと親しく一致して生きるため招かれていることから生じます。キリストの生命にあずかることは、キリストの苦しみにあずかることです。人間のうちで最も罪なき人、人となられた神が、私たちの過ちと罪の重荷を身に負って、最も苦しみました。人の子が苦しんで十字架につけられ、三日目に復活すると弟子たちに告げた時、キリストは、ご自分のあとに続こうと望む者は皆、自分を捨て、日々十字架を取って従わねばならない(ルカ9・22以下参照)と警告なさいました。と言うわけで、イエズスの十字架(私たちの真の自由のため払われた代償と崇高な苦しみのシンボル)と、私たちの心にのしかかり、身体に根差す痛みや苦しみ、悩み、困難、苦悶との間には密接な関係があるのです。苦しむ時、神が私たちのすぐそばにおられることに気づくなら、苦しみは姿を変え、高められます。この確信があれば、寛大に苦しみを受け入れ、痛みをも「生きた清い神によみせられるいけにえとして捧げる」(ローマ12・1)人には心の平和と霊的な喜びが与えられます。このようにして苦しみに耐える人は決して他の人のお荷物にはならず、自らの苦しみに全ての人の救いに貢献します。

キリストと一緒になら、痛みや死にも意義がある

こうして見ると、病気や人間生活の辛い時にも深い次元、希望に満ちた次元が隠れていると言えます。痛みという神秘を前に、私たちは一人ぼっちではありません。平安と喜びの時も、苦悩や悲しみの時でも、人生の全てに意味をお与えになるキリストと一緒にです。キリストが共におられるなら、痛みや死さえも、意味のないものではありません。キリストがいな

ければ何も説明が付きません。人間生活のそこかしこに神が加えてくださったまっとうな喜びでさえも、意味のないことになります。

● この世と教会において、病者は決して受け身の立場ではありません。これについては、第7回世界司教会議の閉会に当たっての教父たちの言葉を思い起こしてみたいと思います。「愛とは何かを全世界に教えるために、皆さんを必要としています。皆さんが社会と教会において正当な場を見つけられるように、私たちはできる限りのことをします。』(「オッセルヴァトーレ・ロマーノ」1987・11・2p.11) 使徒的勧告『信徒の召命と使命』に書いたように、「主はすべての人、一人ひとりに呼びかけています。病人もまた、主のぶどう園で働く人として遣わされています。体が衰え、魂の平安を乱す病気に苦しんでいても、病人はぶどう園で働くよう招かれているのです。それどころか新しい、さらにはより価値ある方法で人間として、またキリスト者としての召命を果たし、神の国の成長に参加するようにと招かれているのです。…多くの病人はくひどい痛みの中で、聖霊による喜び(Ⅰテサロニケ1・6)を抱く者となり、イエズス・キリストの復活の証人となることができます。』(53番) これに関して、病に伏す人は自らの苦しみをキリストの受難と一致させるだけでなく、福音を宣言するため積極的な役割を演じるよう呼ばれていることを忘れてはなりません。病人は自らの信仰体験から、復活した主との出会いに始まる新しい生命と幸福の力を証しすることができますからです。(Ⅱコリント4・10~11、Ⅰペトロ4・13、ローマ8・18以下参照)

この考察が、皆さん一人ひとりに現在の試練を超自然的に耐えさせる力を与えてくれるよう願っています。試練をも、影と疑いの中から神を見出し、日々の十字架という高みから見える広大な地平線に目を向けるための好機とみなすことができますように。

(…) 多くの人々が私のため、また普遍教会の司牧という私の任務のため、祈りと犠牲を捧げてくださいました。お礼を申し上げずにはられません。

(…) グアダルーペの聖母は人間に対して母のような保護を約束し、キリスト信者が捧げてきた称号通り「病人の回復」であることをお示しになりました。聖母の取り次ぎを通じ、皆さんに使徒として心からの祝福を送ります。(メキシコ・シティにて、1999年1月24日)

## イエズス様と一つになれば、痛みも貴い (入院中の子供たちへ)

愛する子供たち、セントルイス訪問中に皆さんのうちの何人かと直接に会って、一人ひとりを抱きしめることができました。とても嬉しく思います。

今日、全員と顔を合わせることはできませんでしたが、皆さん全員が私にとっては大切です。この病院で治療を受けている子供たち、また全ての病気の子供た

ちに、教皇が一人ひとりのためにお祈りしていることを知ってほしいと思います。

皆さんもイエズスがどれほど子供たちを愛し、子供たちと一緒にいることを喜ばれたかご存じでしょう。皆さんもまた、イエズスにとってはとても大切なのです。皆さんの何人かはひどく苦しんでいますし、皆さんもいま自分の身に起こっていることを辛く感じているでしょう。私は、皆さんががんばってイエズスの近くにいてくださるよう、励ましたいと思います。イエズスは皆さんや私のために苦しみ、十字架で亡くなられたのですから。

周りには皆さんをととても愛している人たちがいます。長い間皆さんの世話をし、病院を支えてきた修道会のシスターたち、そしてもちろん、皆さんを愛し、

皆さんが強く勇敢であることを願っている家族や友達です。この人たち全員にも心から祝福を送ります。

今日、私はセントルイスや他の町の、多くの病気の人のことをも考えています。全ての病人と苦しむ人たち、そして高齢者の方々にもご挨拶を送ります。この人々はいつも私の祈りの中で、特別な場所を占めています。教会の心と魂の中で、とりわけ実り豊かな役割を果たしているのがこの人々です。病に伏す全ての人に、イエズスのみ言葉を信頼するよう勧めます。「私は復活であり、生命である。」(ヨハネ11・25) イエズスと一緒になら、試練や苦しみさえも世界を贖う貴重な道具となります。聖母マリアが皆さんと共におられ、心を喜びで満たしてくださいますように。使徒の祝福を送ります。(セントルイスにて、1999年1月26日)

## 「今こそ実行のとき！」

(アメリカの若者たちへ)

セントルイスと全アメリカ合衆国の若者の皆さん。  
イエズス・キリストに誉れあらんことを!

★ 心温まる、熱狂的な歓迎を受けて、たいへん嬉しく思います。今夜、教皇は皆さんの一員ということですね。(…)

今晚、私たちは、イエズスがその言葉を通じて、また聖霊の力によって語られたことに耳を傾けるため、ここに集いました。

聖パウロが若い福音宣教師のティモテオに書き送った言葉を聞いたところです。「敬虔を得るために自分を鍛練せよ。」(Iティモテオ4・7) これは全てのキリスト信者にとって、また本当に主のあとに従い、主の言葉を実行しようと努める全ての人にとって重要なことです。皆さんのような、教会の若い人々にとっては特に重要です。だから自問してみる必要があります。

「私は真のキリスト教的生活を送るために、どんな鍛練をしているだろうか？」

★ 皆さんは「鍛練」がどんなものか、何を意味するかをご存じです。いま私たちのいるここキール・センターは多くの人たちがさまざまなスポーツを競うため、長く厳しい練習を積む所です。今日、この印象深いスタジアムは別種のトレーニング・グラウンドとなっています。それはホッケーやサッカー、野球やバスケットボールの(フットボールについては言及しませんが!) ためではなく、皆さんがさらに断固たるイエズスへの信仰を生きるためのトレーニングです。これこそ聖パウロが述べた「敬虔を得るための鍛練」…皆さんが主のため、また主が呼びになる使命のため保留なしに一身を捧げることを可能にしてくれる鍛練なのです。

先ごろの野球シーズンには、セントルイス中が熱狂していたことを聞いています。二人の偉大なプレーヤーによるホームラン争いですね。目標こそ違いますが、同じく大なる熱狂を感じることができはるはず。その目標とは、キリストに従うこと、キリストのメッセージを世界にもたらすことです。

皆さん一人ひとりがキリストのものであり、キリストは皆さんのものです。洗礼の時、皆さんは十字架のしるしをもってキリストのものとなりました。他の人々と分かち合うべき宝として、カトリックの信仰を受けました。堅信によって聖霊の賜物を受け、キリスト者としての任務と使命を全うする力を与えられました。聖体において、日々の霊的な課題に挑む力を養う糧を受けることができます。

### イエズス・キリストの光と真理を生きる

今日、大勢の皆さんが赦しの秘跡(和解の秘跡)にあずかる機会を得たことを聞いて、たいへん嬉しく思いました。この秘跡では、救い主の優しい憐れみと愛を最も個人的な場で味わうことができます。罪と、その醜い伴侶である恥辱から解放されるのです。重荷が取り除かれ、キリストの新たな生命の喜びを経験します。

皆さんが教会に属し、教会を支えていることを表わすのに、毎週日曜日の教区での聖体拝領以上のしるしはあり得ません。キリストはご自分の御体と御血を与え、私たちがキリストにおいて一つの体・一つの心となるようにしてくださいました。聖体はキリストとの、またキリストの体である教会の他のメンバーたちとのさらに深い交わりへと私たちを招きます。教区で

祝う日曜日の典礼は、弟子たちの共同体におけるイエズスとの真の出会いです。これこそ、皆さんの「主への敬虔を得るための鍛練」の中心部分です。

★ 聖パウロはティモテオに言っています。「年が若いことで人から軽んじられるな。」(Iティモテオ4・12) なぜなら、若さは神からの素晴らしい贈り物だからです。若さとは特別な力とチャンスと責任のある時期です。キリストと教会は、皆さんの特別なタレントを必要とします。主がお与えになった賜物を、よく活用してください。

今は皆さんの「鍛練」の時、身体、知性、感情、精神の成長の時です。しかし、だからと言ってキリストとの出会いや教会の使命への参与を先に延ばしても構わないということにはなりません。若くはあっても、行動するのは、今です！イエズスは皆さんの若さを軽んじられません。皆さんが年を重ね、鍛練を終えるまで待つてはられません。皆さんの鍛練が終わること

はないのです。キリスト信者は常に鍛練の途上にあります。今の皆さんを、キリストは望んでおられます。皆さん全員が世の光となるよう(光になれるのは若者だけであるかのように)お望みです。今こそ、皆さんの光を輝かせる時です。

これまでの旅の中で、私は世界中で若い人々の力と賜物と、愛し、仕える心構えについて告げてきました。どこへ行っても私は若者たちに友人として挑戦し、イエズス・キリストの光と真理に従って生きるよう訴えてきました。キリストの言葉を心にとどめ、心の底から申し上げてください。「神よ、私はあなたの御旨を行なうために来る。」(ヘブライ10・7)

「あなたたちは世の光である。…人の前で光を輝かせよ。」(マテオ5・14、16)

(1999年1月26日、アメリカ・セントルイスにて、若者たちとの会見の時のお話。)

## 神は少しずつ ご自分が父であることを示す

大聖年準備第三年目  
父である神 シリーズ2

1 「主よ、あなたは私たちをあなたに向けてお造りになりました。あなたの内に憩うまで、私の心は安らぎを知りません。」(告白録1・1) 聖アウグスティヌスの告白録の冒頭に記されたこの有名な文章は、神のみ顔を探し求めずにはいられないという人間の抑え難い欲求をまざまざと表わしています。様々な宗教の伝統が、同じ経験を証言しています。「すでに古代から現代に至るまで、種々の民族のうちには、自然界の移り変わりと人生の諸事件の中に現存する神秘的な力について、一種の知覚が見られ、時には最高の神、あるいは父なる神についての認識さえも認められる。」(キリスト教以外の諸宗教に対する教会の態度についての宣言、2番)

事実、世界中の宗教文献に見られる多くの祈りが、至高の存在を認識し、父として呼び求めることができるのだという確信を示しています。地上の父から愛情のこもった世話を受けた経験を通して、天の御父に達するのです。このような関係から、現代の無神論の流れの中で、神という概念そのものが父の姿を投影したものに過ぎないのではないかという疑いが起こってきました。でもそれは実際には根拠のない疑いです。

### 神は愛の父であることを

#### イスラエルにお示しになった

とは言え、人間はしばしば体験に基づいて、神をも人間のような姿で、人間の世界に引きつけすぎて考えがちであることは事実です。こうして神の探求は、聖パウロがアテネ人への説教で述べたように(使徒行録

17・27参照)「手探りしながら」続きます。従って、このような影やあいまいさを払いのけて光を明るく輝かせるものは神ご自身がお示しになった完全な啓示以外にないことを認識し、宗教体験のこうした明るい面と暗い面に心を留めなければなりません。

2 パウロがアテネ人たちへの説教の中で、人間の神的な起源について述べた詩人アラトスの一節を引用して言ったように(使徒行録17・28参照)、教会は他の宗教が神のみ顔を見極めようと試みる企てに尊敬のまなざしを向けつつ、それらの信心の中でキリスト教の啓示に受け入れられるものと相いれないものとを区別します。

その意味で、神をこの世と人類との普遍的な御父として認識することは、すぐれた宗教的洞察であると考えねばなりません。しかし、恣意的できまぐれな神という概念は受け入れられません。たとえば古代ギリシャでは、神的で至高の善なる御方は父と呼ばれていましたが、ゼウスの神の父性は、情け深さと同様に怒りや敵意においても現われました。オデュッセイアには次のように記されています。「父神ゼウスよ、あなたほど酷い神は他にはおられない。あなたはご自分が生じさせておきながら、人間が不幸や耐え難い苦しみに遭うのを憐れむことをなさらない。」(XX, 201-203)

しかし古代ギリシャには、詩人クレアンテスの「ゼウス賛歌」に示されるように、気まぐれやわがままを超えた神を求める声もありました。父である神、寛大に生命の贈り物を授け、必要なものを与えて養ってくださる神、でも同時に、時にははっきりした理由もない

まま厳しく罰する神の姿は、古代社会の家父長制に結びつき、一般に広く抱かれていた考え方が宗教レベルのものに移行したのです。

**3** イスラエルでは、父である神という認識は、偶像崇拜への誘惑のためにたえず危機に瀕してきました。預言者たちはこれを激しく非難しました。「木切れに向かって彼らは言う、『あなたが私を生んだ』と。また、石に向かって言う、『あなたが私を生んだ』と。」(エレミア2・27) 実際、聖書における宗教体験にとって、父である神という認識は、創造のみわざよりもむしろ、神が救いのため歴史に介入し、イスラエル民族と特別な契約関係を結んだことと関わっています。神はしばしば、この父としての愛にふさわしい応答が得られなかったことを嘆いておられます。「主が語られる、『私は子らを養い育てたが、彼らは私に逆らった。』」(イザヤ1・2)

イスラエルにとって、神の父性は人間の父性よりも信頼できるものでした。「そうだ。父母は私を捨てたのに、主は私を拾い上げられた。」(詩編27・10) 痛ましくも見捨てられて、神のうちに地上の父母よりも慈しみ深い父を見出したこの詩編作者は、いかにしてこの思いに至ったかを示しています。「あなたについて私の心は『主のみ顔を探せ』と言った。主よ、私はみ顔を探し求める。」(詩編27・8) 神のみ顔を探し求めなければなりません。それは、誠実な心でたゆまず続けるべき旅です。正しい心のみが、「主のみ顔をたずねる」(詩編105・3以下参照) ことに喜びを見出すことができ、彼らの上に父である神のみ顔は輝きます。

(詩編119・135、また31・17、67・2、80・4、8、20参照) 神の掟を守れば、契約の神の保護のもとに守られます。祭司アーロンの取り次ぎによって神が民

にお与えになる祝福とは、まさしく神のみ顔の輝きを現わすことに他なりません。「主がおまえに輝く面を向け、慈しみを示したもうように。主がおまえに面を向け、平和を与えたもうように。」(荒野の書6・25～26参照)

#### イエズスは神の子としての ご自分の生命を与えてくださる

**4** イエズスがこの世に来られて以来、父なる神のみ顔を探す旅はさらに重大な局面を見せ始めました。イエズスは御子としての経験に基づいて教え、すでに旧約聖書で大まかに述べられていた父である神という概念を確認されました。実際、イエズスは常に父なる神を強調し続け、言葉にできないほどの親しみ深さで生き抜き、救いを望む全ての人の生きるべき道として示されたのでした。

何よりもイエズスは、神的父性との比類のない関係を表わしています。自らが「子」であり、御父に至る唯一の道であることを示しています。「私たちに父をお見せください。それだけで十分です」(ヨハネ14・8) と願ったフィリポに、私を知ることは父を知ることだ、父は私を通して働かれるのだから、とお答えになりました。(ヨハネ14・8～11参照) それゆえ、御父に出会うことを望む人は、御子を信じなければなりません。神は父としての摂理的な配慮を私たちに約束するだけでなく、ご自身の生命を伝え、「御子における子供たち」としてくださいます。使徒ヨハネは心からの感謝を込めて述べています。「考えよ、神の子と称されるほど、御父から計りがたい愛を受けたことを。私たちは神の子である。」(Iヨハネ3・1)

(1999・1・13)

## 〈教皇さまの動き〉

●2・10 この日の一般謁見で、教皇さまは先日のメキシコとアメリカ合衆国訪問を振り返り、お話しになった。「南、北、中央アメリカとカリブ海諸国のキリスト教共同体は、新たな信仰と一層の団結のうちに発展するよう招かれています。」「メキシコの会見では一つのスタジアムにあらゆる年代の人々が集まりましたが、信仰がどれほど各世代を結びつけることができるか、また人生の各瞬間に直面する難問に答えを与え得るかを証明する、すばらしい機会となりました。」「メキシコでも合衆国でも、多くの若者たちと会うことができました。彼らは新しい時代に向けて、勇気ある証し、積極的な連帯、寛大に福音に仕える熱意を示してくれました。」「今回のアメリカ訪問はある意味で、生

命と家族の福音を迎えるように、また受胎から自然の死まで、個人に加えられるあらゆる形の暴力を知性と道徳性をもって退けるようにという招きです。墮胎や安楽死、むやみに死刑を執行すること、人種主義、子供や女性、原住民の搾取…こんなことはもうたくさんです。武器の売買、麻薬取引、環境破壊に終止符が打たれますように。」

●2・11 1929年のこの日、教皇庁と当時のイタリア王国との間にラテラノ条約が締結され、主権国家としてのバチカン市国が誕生した。(国際法上、外交関係を行行使する主体と認められているのは教皇庁である。) 総面積44ヘクタールのバチカン市国は1954年のハーグ協定により、戦争や武力紛争から保護されてい

る。市内の文化財は、国際的にも人類の宝と認められ、世界文化遺産に登録されている。今年70周年を迎える条約締結記念日は市国全体の祝日となっている。

●2・13 教皇さまはローマ市内各所の学校から、7千人にのぼる教師と生徒たちをお迎えになった。「一国の社会と人間の発展は、大部分が学校の質にかかっています。」「市民共同体、また教会共同体の全ての人々が学校の抱える問題に目を向け、特に困難な状況にある子供や見捨てられた子供たちに注意を払いつつ、若い人の全人格的発展に寄与するような、また彼らの希望や将来の職業設計を支えるような活動を進めていくべきです。」午後、教皇さまは年に一度のローマ大神学校訪問に出かけられた。「神学校では聖霊の働きのもと、人間を捕まえる漁師になるための秘訣を学びます。希望の御母マリアはキリスト信者、特に使徒の頼るべき母です。…皆さんは聖母から網の投げ方や奇跡の漁の秘訣を学ぶことでしょう。」その後の雑談で、教皇さまは教皇に選任された時の秘話をお話しになった。「選任会議の最後に全てがはっきりした時、ビシンスキ枢機卿が私に言いました。『ヨハネ・パウロと名乗るのがいいでしょう。』『私もちょうどそう考えていたところです』と私は答えました。あれは私の最後の召し出しでした。『あなたはペトロである』、『あなたはヨハネ・パウロである』が私の召命です。」

●2・14 朝、教皇さまはローマ市内の小教区でミサを挙げ、「教区が開かれて活気にあふれ、地域の霊的な問題に対処できる場となるよう努めてください」と述べられた。正午のお告げの祈りの時間には、聖ベネディクトと並ぶヨーロッパの守護聖人聖チリロと聖メトジオに言及し、合わせて間もなく始まる四旬節について話された。「スラブ世界への偉大な福音宣教者聖チリロとメトジオは、教会と人類に霊性と文化という計り知れない遺産を残しました。」「紀元二千年を前に、広大な宣教の地平線が広がっています。聖年の扉が、キリストの光を必要とする社会に向けて開こうとしています。古いヨーロッパは福音の贈り物を受けましたが、今や人々や国々を助けて自由と真理を結びつけ、霊的・道徳的基盤に立った経済面や政治面での統合を保証する、新たなキリスト教の宣布を必要としています。」「二千年を目前にした今年の四旬節は、かつてないほど〈御父の家に帰る〉のに好都合な時です。それはまことの改心に向けた旅ですが、罪からの解放という受け身の面だけでなく、善を選ぶという積極的な面

をも持っています。赦しの秘跡の深い意味を再発見する良い機会ではありませんか。」

●2・17 一般謁見で。「四旬節の始まりに当たり、神の豊かな憐れみの賜物を受ける準備が大切になります。…教会は、個人や共同体の真の刷新のための手段として、祈り、償い、断食、善行を勧めています。」「四旬節は、神が罪の赦しをお授けになる特別な時・和解の時です。赦しの秘跡に近づく、またとない良い時です。」同日、灰の水曜日のミサで、教皇さまはみことばの祭儀を行なわれた。お説教の中で、「いま死は目の前の現実として存在しますが、初めからそうだったわけではありません。最初、死は存在しなかったことを救いのみわざが教えています。」「キリストの死は人間の死を打ち砕きました。四旬節は私たちがゴルゴタの惨劇に引き戻しますが、それは後に来る復活祭の出来事、輝かしい復活の喜びに浸るための準備としてなのです。」「四旬節は祈りに集中し、賛美を捧げる時、償いと断食の時です。…四旬節の犠牲や善行の実行は、共同体や社会の中で大きな重要性を持ちます。それらはより正義にかなった富の配分を促すきっかけとして〈改心〉が必要であることを訴えます。全ての人が尊厳を持って生きると同時に、被造物を守ることができるためです。」

●2・18 四旬節の始めに当たり、教皇さまはローマの聖職者たちとの会談に臨まれた。現在継続中のローマ市内での福音宣教に関連して、「あらゆる時・あらゆる状況でキリストの福音を宣言し、証しするためには、教区内の家庭のみならず、人々が働き、勉学に励む所ならどこであれ福音宣教の対象と考えるべきです。」「市民への福音宣教は、誰よりも信徒に託された仕事ですが、各個人のとよりはず共同体全体の、また共同体責任者の取り組むべき仕事です。皆さんはいつでも、どこでも福音の宣教者であり、またそうでなければなりません。」教皇さまは司祭たちに向かって、「生活の全ての面でキリストの証人となるため呼ばれている信徒を養い、支えること」は一人ひとりに課せられた義務である、と話された。「形成と霊的な成長のために最も大切なのは、祈り、要理教育、償い、改心、神の愛と兄弟姉妹のために心を開いてゆくことです。」「仕事の環境によっては世俗化が進み、神やイエズス・キリストについて話すことが困難な場合もあります。それでも実際には、決して神と無関係な事柄はありません。」

「教皇様の聲」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙

■毎月10日発行 ■定価：送料とも一部186円 ■年内定期購読：送料とも一部2,087円(税込)

詳しくは、精道教育促進協会までお問い合わせ下さい。

財団法人■精道教育促進協会 〒659-0093 兵庫県芦屋市船戸町12-6 TEL. 0797-31-3452・FAX. 0797-31-3448

振替口座：01130-8-72393 財団法人 精道教育促進協会